

あいさつ から 思いやりの心 まで

江戸しくさに学ぶ 子どもの「作法」

- 越川禮子
- NPO法人日本ホスピタリティ推進協会



はじめに

私の外交哲学は、エドナイゼーション（江戸の心を今に活かす）で世界に平和を！、というものです。

このような哲学が生まれた背景をお話ししますと、私はお江戸日本橋で生まれ、隅田川で産湯につかり、歌舞伎や江戸浄瑠璃が大好きなチャキチャキの江戸っ子として育ちました。同時に若い時のフランス留学に始まり、好奇心を五大陸に拡げて日本外交の一翼を担い、世界中を飛び回ってもしました。

その二色の経験を縦系と横系として織り上げた結果、生まれた独自の哲学です。

まず、日本の文化と歴史に自信を持つこと。飛鳥、奈良、平安、鎌倉、室町、江戸時代と並べてみても、その絢爛豪華さは目を奪われればかりです。

なかでも、江戸時代は、現代の世界が直面している問題を先取りして実践した、先駆的な時代ではないか、というのが私の考えでした。

過密社会での人間関係Ⅱ「人の和の大切さ」、資源有限社会での物の大切さⅡ「リサイクル型の生活」、多様な文化を持つ庶民の暮らしⅡ「大衆文化社会」などなど、二十一世紀の人類社会が解決すべき課題を巧みに処理して三百年の平和を保ったのですから、世界に誇れる文化と歴史ではないでしょうか。

本書で、ホスピタリティ精神に溢れた江戸人の心に触れていただきながら、子どもたちがその精神を現代に受け継いでいただきたい、それが私の夢でもあります。



ある朝の駅。電車がホームに入ってきた時、若者二人が周りの人を押しのけて車内に入ってしまったんだ。二人は二つの席を奪い取った。他の人は怒るよね。

そしたら、その二人が「おじいちゃん、おばあちゃん、こんにちは」と、大声で叫んで、手招きしたんだ。おじいちゃんとおばあちゃんは「すみませんね。ありがとうございます」と、「さいます」と、二人の若者にも周りの人たちにも、深々とお辞儀をしていた。

さらに感動したのは、その後。席を譲った若者二人は、周りの人たちに「迷惑をおかけいたしました。申し訳ありません」と頭を下げたんだよ。

乗客たちは、感心したり、感激したりで、拍手まで起きた。車内は笑顔でいっぱい。小学生のキミたちは、まず「こぶし腰浮かせ」から始めてみない？

江戸時代へ行ってみよう



一人でも多くの人
が座れる
こぶし一個分の心配り

こぶし腰浮かせ



足を広げるとっさり座らず、足をそろえてちょっとずれる。



こぶし一個分

「傘かしげ」「肩引き」「蟹歩き」そして「こぶし腰浮かせ」。どれも譲り合う気持ち、相手を思いやる気持ちから生まれたしぐさだニャ。



江戸時代には電車はなかったけれど、渡し舟や茶屋の縁台に座る時、一人でも多くの人座れるように、後から来た人のためにちょっと腰を上げて席を詰めたんだ。それが「こぶし腰浮かせ」だよ。

思いやりの心と生き方のセンスを磨く「江戸くせわ」

人口100万人を超える大都市であった文化・文政の頃の江戸。その城下町では約80%の人々が何かしら商売を営んでいました。この時代の商人のリーダーたちが「どうしたら争いのない平和な暮らしができるのか」を考え、生み出された心構えが「江戸くせわ」です。

このように庶民の中から自然に生まれたものではなく、江戸城下町の商人の上に立つ町衆たちが「繁盛くせわ」「商人くせわ」と呼んで、率先して実行し、子どもたちに徹底して身に付けさせた考え方と立ち居振る舞いです。それがイキで格好良く、真似してみると気持ちがいいことから、少しずつ江戸庶民に広がっていきました。

中身が伴わないいわべだけの「かっこいい」ではなく、人としての思いやりや心づかいが根底にあるからこそ、多くの人を魅了したのだと思います。

心の底にある思いやりの気持ちの自然な表れであり、大人も子どもも実践すると気持ちいい「癖」として身に付けた「江戸くせわ」は、自然と争いもイシメもしたくなる気持ちを育みます。江戸時代は相手を思いやる温かい気持ちや言動が、当たり前のように日々の生活の中に溢れ、大人も子どもも心が豊かでした。このくせわは今の時代にも、いえ今の時代だからこそ受け継ぎ、語り継がれるべき生き方だと思っております。

本書を子ども向けのマナー本としてではなく、人として大切な思いやりの心を育み、生き方そのもののセンスを磨く一冊として、ぜひ親子で一緒に楽しみながら身に付けていただけると幸いです。